

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

《ハーン研究の課題》(2)

著者	原田 熙史
出版者	法政大学教養部
雑誌名	法政大学教養部紀要．外国語学・外国文学編
巻	103
ページ	1-12
発行年	1998-02
URL	http://hdl.handle.net/10114/3705

《ハーン研究の課題》(二)

原 田 熙 史

〈珍奇と魅惑〉

ハーンを白人的優越感に浸る人種主義的傍観者と見なす根拠に、かれの“エキゾティシズム”が挙げられよう。確かにエキゾティシズムと見紛うかれの異文化接近——とりわけ西洋文明と対極的に異なる日本文化への驚きと困惑には、白人特有の生理的反応を一部伴っている。しかしかれの記述をつぶさにたどるとき、そこに浮上するのは憶測とは裏腹に共感と禁欲に裏付けられた“ヴィジョン”の世界である。かれが日本社会を論じた代表的エッセイに“Strangeness and Charm”があるが、それはこうした事情を雄弁に物語っている。かれは外人旅行者が記した日本の第一印象の多くが好意的 (Pleasurable) であることを認める一方、日本が他に訴えかける活力に於て何か欠けるものがあることに気付き、その“訴えそのもの” (the appeal itself) が問題の鍵であると指摘する。しかし文化的優越論者とは異なりかれは“その問題は人種と文明の特性に依拠する”¹⁾と明言し、更に続けて言う。

“わが日本の第一印象——陽春の光最中の日本——は多分とりたてて他と異なるものではなからう。わけても私はその印象 (the vision) の“不思議” (the wonder) と“喜び” (the delight) をよく覚えている。その不思議と驚きはその後も消え去ることはなかった。それらは時に応じ、十五年後の今でも、しばしば私の心に甦る。

しかしそれらの感情の由来は知り難く、或るいは測り難い、というのも私はまだ日本を知り盡きたとは言えない……昔親友だった日本人が死ぬ間際に私に言ったことがある…“四、五年経って君が日本人は全く理解できないと悟ったとき、君は日本人を分り始めていると。”この友人の予言が正しいことを理解した後——私が日本人を全く理解できないと悟ってから——私はこのエッセイが書けると思う。”

“日本人は理解し難い”と認識したとき始めて日本人が分るようになるとのパラドックスは、正しく異文化接近に際してのわれわれ共通の実感であり、ひとえにハーン個人の人種的偏見の表明とする太田氏の見解は余りに性急過ぎよう。ハーンは言う。

“はじめて体験したとき、日本の物事の外形上の珍奇さ (strangeness) は、(確かに人によっては) 名状し難い奇妙なスリル——全くなじめぬ奇妙な感情 (a feeling of weirdness) を呼び起す。”

日本初体験のハーンにとってこうした感情は具体的には“小柄な群集であふれる殊更小さな通り”、“変った形の衣服や履きもの”、“見ただけでは識別し難い男女の別”、“白人には物珍しい家の造りとしつらえ”、“店に陳列された用途不明の品々”、“出所不明の食品”、“奇妙な形の道具”、“神秘に包まれた法具”、“異形の神々や玩具”等々。しかもその珍奇さは近代産業製品(電柱、タイプライター、電燈、ミシン)との“共存”、“対比”によっていやが上にも度を増す。そしてそれらの代表格が外ならぬ“景観”をエキゾチックに見せる不思議な“漢字”である。

第一印象によって脳裏に刻まれた“珍奇の感”は消し去られる筈はない。それは人々の振るまいにまで及び、その一挙一動は西洋とは正反対であり、それが“正反対”というのは当の日本人にとっても確かに奇異な事実である。後ろに“(backward)”は文字通り行動の空間的志向性(方向性)を指摘したもので、本来“価値判断”(遅れた)を示そうとしたものではない。

行動様式の単なる類比を越えてそれが“対極的”と認められるものに大工がかななやのこぎりを“押さ”ずして“手前に引く”こと、常に左側が真にして右側が偽であること、錠の開け・閉じ(鍵の回し方)は西洋人とは逆の方向であること等枚挙にいとまもなく、かつてパーシヴァル・ロウエルも“日本人が、後にさがって(backward)

話をし、物を読み、物を書く”ことを正しく観察し、“それが対極の基本である”と指摘した。ハーンは日本人の筆運びの習慣にはそれなりの理由があることを認め、書道の求めによって書家は筆やペンを“引いて動かす”のではなく、それを“押さえる”ことを洞察する。

更に緻密な観察は、御針子が針に糸を通す際の行動様式の究明に於て遺憾なく發揮される。御針子が“針に糸を通す”と記述したが、実はこの表現自体が西洋的発想に基づいている。ハーンは日本の御針子が“針の目に糸を通す”のではなく、“糸の先に針の目を近づける”のを不思議に思う。そしてその不思議さをかれは日本の剣道に結びつけて説明する。かれによれば剣を構えて一撃を加えるとき、剣士は攻撃の瞬間剣の刃を手元に引くのではなく、それを手元から押しやるのである。実際かれ（剣士）はアジア人の例に漏れず、くさびの原理ではなく、のこぎりのそれによって刃を用いるが、攻撃の際にはわれわれ西洋人が引く（べき）所作を期待するのに反し、日本人は刃を突きつけることもある。ハーンは結論して言う。

“たとえ身体的なものにせよ、こうした珍奇な (unfamiliar) 行動は“他の惑星の住人、(the population of another planet)、われわれ西洋人とは全く無関係な人間存在、”解剖学的相異、(some anatomical unlikeness) を呼び起こすに十分である。しかし、こうした“相異”は決して地球上には存在しないのである。…と言うよりこれらの“対立・相異、(all this oppositeness) は恐らくアーリアの経験 (aryan experience) とは完全に独立した人間経験の結果、というよりむしろわれわれよりも進化論的には若い（人間）経験の結果を意味するであろう。しかし、その経験は“決して劣った種類のものではない”。(no mean order) その活動は人を驚かすばかりか喜びを与える。精緻で完璧なまでの手際、ものの軽やかで弾力性に富む美、最少の材料で最大の効果を狙う力の表示、手わざによる機械的成果、美的価値としての不規則性の理解、完璧なまでに均斉のとれた趣味、色彩や色調に見られる調和の感覚——これらはすべてわれわれ西洋人も芸術や趣味のみならず節約 (economy) や用 (utility) の問題に至るまで、この遠い文明国から多く学ぶべきことを即座に悟らせる。驚歎に値する陶器、鮮やかな刺繍、すばらしい漆、象牙、青銅細工、だが目を見張らせるのは“異郷の幻想” (barbarian fancy) で

は断じてなく、それらは全く新しい方式によってわれわれの想像力を磨いてくれる。否、これらは自らの制約にも拘わらず、芸術家のみがその活動を評価しうる精緻を極めた文明、二千年以前のギリシャ文明をも「不完全(imperfect)」としか呼べぬいわゆる識者達が「不完全」と称する文明の所産である。⁽¹⁾

広範に跨がる資料収集の手腕に加えて、かれ一流の鋭い分析能力を駆使して、ハーンは人類学者のフィールドワークにも比肩するグローバルで巨視的な東西文明論を提起する。かれは文明理解の第一段階として「外形的」な「もの」の分析・把握を徹底させ、次いでこれらの形態・様式を育む文明(或いは文化)の内的動因(美や道徳を支える内的価値)の探索へと押し進む。ところで対象の「量性」にのみ着目して社会の優劣を判定する西欧近代の「合理的・効率的」対象認識を「人類進化」の重要な「一過程」と承認しつつも、他方ハーンは「異なる」進化の過程、西欧の知的成熟に比すれば一層「若く」、それ故美と洗練を目指す感性の人類進化に強く心を寄せていた。かれは美と道徳性を内に秘めた今一つの意識の過程を日本文化に見出し、これを賞賛すらしたのである。かれはこうした「若く」して「想像的」な文化を低次のものとして排除するのではなく、むしろそれこそ「独自性」に富み、近代西欧すら「学ぶべきことの多い」相即的存在と認めるのを憚らなかつた。そしてこうした文明への寛容で多元的なアプローチこそ、西欧近代がそのドグマ(理性万能主義)と普遍思考の故に、異文明と対立・抗争し、人類の破局を迎えるに及んでようやく手にした認識規範なのである。今世紀を特徴づけ、それ故現代を人類史上最も悲惨な世紀たらしめたものこそ、政治的・宗教的セクトとそれに基づく人種差別であつた。

こうした意味に於て、ハーンこそ「自文化中心主義(ethnocentrism)」を嫌悪し、これを排除した先駆的革命家の一人といえる。確かに太田氏の指摘される如く、かれには時として異文化体験への絶望と決別とも見紛う告白があつたことも事実であろう。しかし生来「楽天的」で、「移動し・漂泊する」ことによって(論者の説くかれの「移動認識」によって)、それまでの傷つき、癒されぬ心を回復し、認識の相対化を計り得たかれは——例えばニューヨークでの都市体験からカリブ海での自然回帰への変身及びその可逆体験——自らの認識の羅針盤(或いは星座)を絶えず調整し、修正し続けた「稀有の天才」(ルース・ベネディクトとも共通するあらゆる人間への共感者)で

あった。確かにかれにとってこの地球、そしてそこに住むあまたの民族とその文化はかけがえのない、それ故愛し、賞賛すべき対象であった。

〈心の作用と進化論〉

珍奇なものへのハーンの烟眼は“物的”なものから更に“心的世界”へと及び、かれの想像力は頂点に達する。ハーンは説明する。

“しかし日本人の根底を形づくるその独自性は“視覚的”・“表面的”なものより“心の領域”(psychological strangeness)に於てその真価を発揮する。われわれ西洋人は誰一人日本語を完全に征服し得ぬことに気付いたときはじめて日本語の“奥ゆき”(the range of it)を知るのである。“人間性を分ける二つの基盤”(the fundamental parts of human nature)たる“東と西”(East and West)——それは人間を分ける“感情の基盤”でもあるのだが——それらは“本来は同じものである”……日本人と西洋の子供との知的相違は目には見えない。しかし成長するにつれてその相違は目に見えるものとなって拡がり、大人になると、それは言語に絶するものとなる。日本人の知的構造のすべては西洋人の心的発達とは無関係の形態をとって発達する(evolves)……思想の表現は制限され、感情的表現もわれわれを当惑・驚歎させるまでに押し込められる。日本人の思考はわれわれ西洋人とは異っている……かれらの道徳生活はわれわれから見ると未だ極めることのなかった、或いは多分長く忘れ去られていた思考と感情の領域を示している。日常句の一つを西洋の言葉に翻訳するとそれはほとんど意味をなさない……また逆に最も簡単な英文を日本語に訳そうとすると、それは西洋の言葉を学んだ経験のない日本人には全く理解されぬであろう。われわれが日本語の字引きですべての単語を学んでも、その知識だけでは、われわれが話してそれを理解されることは不可能であろう。そのためにはわれわれは日本人のものの考え方、——即ち——一歩下がつて(backwards)ものを考えること、ひっくり返し・裏返してものを考えること、西洋人とは全く

違ったやり方でものを考えることを学ばねばならない。⁽⁵⁾

ところで、民族の“メンタリテイ”を左右するのは断じて“人種”の相違ではなく、かれらを育む文化的・社会的基盤であることを人類学者ルース・ベネディクトは立証したが、それはハーンの心的進化論と著しい符合を示している。なぜなら“人間性を分ける二つの基盤”——いわゆる東と西——は“本来は、同じものである”ことをハーンは確認し、もし民族の“知的構造”を分け隔つものがあるとすれば、それはその民族を育てはぐくんだ“ものの考え方”即ちベネディクトの指摘する“文化の型”——例えば日本人の思维形式は西洋人とは全く異なり、否全く逆に一步下がって、裏返してものを考える——に依拠することをかれは力説して止まぬ。ちなみにベネディクトの文化社会依存説は人種の遺伝的優劣を信奉する“生物学的決定論”に真っ向から対決する“反人種差別論”に他ならなかった。ダグラス・ラミス氏はその著『菊と刀』再考⁽⁶⁾の中で次の如く指摘する。

“彼女の学説の重要点は人種がどう定義されようと、人種の違いが人間の性格、能力、文化を左右することはないということである。ベネディクトにとって人類学の最大の発見は文化が圧倒的な力を發揮するということがあった。人間の相違を決めるのは文化であり、文化が変化することにつれ、同じ民族とて栄えることも衰えることも、活力をもつことも退廃すること、團結することも分裂することもある。人間が幼少にして異文化に移り住んだとき彼（彼女）は自らが育った国の言葉を話しその国の習慣になじんで成長するのである。⁽⁶⁾”

人格を決定するものが言語や思考形式（習慣）であるとの強い認識はハーンにも同様に認められる。かれの次の言及はベネディクトの思想をより具体的に説明している。

“ヨーロッパの言葉を習得した経験があっても日本語を学ぶには火星人の話す言葉を学ぶ際と同様ほとんど役に立たぬであろう。日本人のように日本語が使えるためには、われわれは今一度生まれ変って、心を完全に逆転して再構築せねばならない。ヨーロッパ人であっても、日本で生まれ、幼少から日本語に慣れ親しんだものは、晩年に及んでも心を日本の環境になじませる“本能的”知識を留め得るであろう。事実ブラックという名前の日本生まれの英国人がいて、かれの熟達した日本語はプロの“話し家”として立派に生計を立てている。しかしこ

それは例外と言えよう……日本の文字については、それを習得するには何千もの漢字の知識が必要となろう。いかなる西洋人も目前の日本語を即座に訳すことは不可能である——實際日本の学者とてそれができるのはごく僅かであり——加えて多くのヨーロッパ人が示したこの種の知識は驚歎に値するけれども——日本人の助力なしにそれが日の目を見ることは全く不可能である。”

〈心的進化論の展開…複合思考〉

ハーンとベネディクトの対比によってかれの文化的相對主義及び西洋を範と仰ぐ“自文化中心主義”からの決別が一層鮮明となろう。そしてそれはやがてかれ独自の“心的進化論”——遺伝や形態と密接に関わる生物学的進化論とは一線を画す精神的進化論——へと展開を見るに至る。この上なく興味深いハーンの次の言葉、“かれらの道徳生活はわれわれから見ると未だ極めることのなかった、或いは多分長く忘れ去られていた思考と感情の領域を示している”がそれを解く重要なキーワードとなる。ところでこの二つに区分されながら統合されたかれの命題は果して何を意味しているであろうか。端的に言えば“未来”と“過去”の要素を矛盾したまま連結・統合したこの命題こそハーンのメンタリティとその“美しき謎”を解く鍵と言えよう。

対立的統一命題の解明に先立ち、われわれはかれ独自の“精神”の“進化論”が当時二世を風靡したハーバート・スペンサーの社会進化論に少なからず影響されていたことはかれ自身の引用からも自明であるが、その際ハーンが生物進化論——とりわけ自然淘汰や弱肉強食を強調する植民地支配に繋がる思想——よりもむしろ精神の進化にその力点を置き、とりわけ美的・靈的進化を重視して、進化論特有の“展開”(evolution)の思想、いわゆる“価値”の相対化や判断の停止を拒み、むしろ価値の選択・目的化を積極的に説いたことは注目し値する。そしてそれらをスペンサーの総合哲学と比較するとき、かれの哲学が人間の内的体験に及ぶや、それが道徳——善と惡の識別——的な理念をかけた、より目的論的となったことが理解されよう。こうした意味では、ハーンの思想はジュリア

ン・ハックスリーや現代イギリスの著名な発生生物学者C・H・ウォーデントンに「一層近いと言えよう。ウォーデントンはかれの著書『エチカル・アニマル』（この書のタイトルに注目）の中でジュリアン・ハックスリー（『倫理の試金石』）を引用しつつ自らの「生命倫理」（内的進化論）を説いている。

「さらに言うならば進化の過程で価値というものが出現するのだから、科学者たるもの、これを考慮に入れないければならない。価値はたんに進化の過程であらわれるばかりでなく、そのもつとも現代的な局面においても活発な役割を演じている。われわれは価値には高次のものも低次のものもあることを直截かつ明白な事実として知っている。科学的に分析してみると進化の方向には望ましいものとそうでないもの、価値あるものとそうでないものがあるのを発見する。進化論にもとづく広大な科学的世界は、精神や価値をも説明するものでなくてはならず、その意味で純粋に物理的な世界観ではたし得ない機能をそれが担うことが可能だ。それは知識と知的な視野や方法論を与えてくれると同時に、進むべき指針をも与えてくれる。そうして、科学的論理の確立の助けとなるのである……」

わたしの主張は、倫理的価値と人間進化との結びつきが、ここに引用したハックスリーが示唆しているものよりもずっと緊密であるということだ。価値はたんに出現するというものではない。情報の社会遺伝的な伝達にもとづく、とりわけ人間的な進化のモードは、そのメカニズムの機能的な要素として倫理的信条の特性をそなえたものの存在を必要とする。社会遺伝的な伝達が作用するに先立って送り手と受け手の精神器官になにか「権威」になうシステム⁹のようなものが形成されねばならないのである。

ウォーデントンの説く「倫理的価値」と「人間（生物）進化」との結合はハーンの主張する進化論的文化理解の内容に極めて近いと言える。ウォーデントンは進化の過程に「価値」の出現を認め、それ故新しい科学は精神や価値を十分説明できるもの、進化は機械論的メカニズムを越えて、高次で望ましい価値の確立（倫理的信条）を目標とするものであると説いたが、美や道徳といった非生物学的伝達をも遺伝子によらぬ情報、「社会遺伝」という今一つの伝達モードと認めて倫理的進化を「精神器官」が営む「権威をになうシステム」と定義したとき、それはス

ペンサーの影響下にありつつ、人間進化を高次の精神現象へと飛躍させたハーンの偉業と奇しくも一致する。

ハーンの進化論が一方に於て倫理的且つ目的論的であるのに対し、他方それは未来と過去、前進と後退の矛盾した対極的要素をうちに孕んでいる。こうした二律背反或いはアンビヴァレントな思考様式はハーンの意識構造に見られる今一つの特徴である。ハーンは文明や社会を常に相反する対極的な要素によってダイナミックに把握し、それを重層的に認識するのを常とした。既に引用したかれの文化観或いは人間感情についての考察にもこうした相異なる二つの“構造契機”の指摘が見られる。その典型的なものに“東と西”、“近代と伝統”、“感情と思想”といったかれ特有の視座の原点がある。とりわけかれが人間を対象としたとき、その認識の根底には“感情世界”への深い洞察が優先していた。今世紀を代表する美術史家ハーバート・リードもまた、“アイコン”（イメージ）は“アイデア”（思想）に先行するという新たな外界認識のための基本原理を提起し、文化形成に於ける人間の“直観”と“想像力”を重視したが、ハーンに於ても文化理解の根本原理は言うまでもなく“感情”のそれであった。

感情に裏付けられた知識や道徳の世界は意識の下部構造とも言うべき独自で自律的な“発展”を遂げる。文化に於ける二つの感情の基本形式が誕生し、日本文化は本来は同一のものでありながら、西洋人のそれとは全く異った感情世界を形成するに至る。ところでこうした日本的（おしなべて東洋的）感情世界、とりわけその道徳生活はハーンの烟眼によって、“西洋人が未だ極めることのなかった、或いは長く忘れ去られた”意識の領域であると指摘される。西洋との比較・対照の末かれがようやく到達したこの異文化認識には、西洋とは異なる“進化”の展開によって美的・道徳的優越を誇る日本文化への謙虚なオマージュが表明され、かれ独自の二元論によって西洋が“未だ極め得ず”、それ故学ばねばならぬ進化の領域の存在が提起されるに至った。“自文化中心主義”を謳歌して来た西欧社会にコペルニクスの思考の転換を迫ったのである。それは同時に今世紀西欧社会の行く手をも先取りしていた。

ハーンの見解はそれのみに留まらぬ。それに続くかれの次の言葉“或るいは長く忘れ去られた”にも認められる。一見“進化論”とは矛盾する、否むしろ“記憶”への畏敬すら示唆するこの言葉にかれは如何なる思いを託していたのであろう。われわれはかれの“復合的思惟”の典型をここに見出すことができよう。実際かれは進化の意義と

共に、「記憶」（「過去への進化」）の重要性を誰よりも深く洞察していた。近代の合理主義によってはおもしろ「退化」（退歩）とさえ考えられる人類の神話的世界へかれはいち早く身を投じていた。ここに一つのヒントがある。それは今世紀深層心理学の泰斗、ユングが説いた「シンクロニシティ」論である。ことわるまでもなく、ユングは人間の心、とりわけ意識の深層にメスを入れ、集合的無意識、原型、セルフ等かれ独自の独創的諸説を提起したが、とりわけ興味深いのが「シンクロニシティ」の仮説である。

言うまでもなく、ユングは人間の心に於ける様々な対立・葛藤——とりわけ生と死、内と外、自我と自己等——に焦点を合わせ、その秘密の解明に専念したが、そのなかにあつてのかれの最大関心事は「過去」と「未来」の対立とその解決（和解）であつた。人間を引き裂き、敵対させるこの二つの契機を見極め、その和解を、二元論的対立の一元論的統合を計ろうとした。実際われわれの意識に於ては「未来」と「過去」は果てしなく「遠ざかり」、隔てられ「てゆく。しかし、かつて非ユークリッド幾何学が直線の両極は際限なく隔たることによって、両者は究極的に合致すると説いた如く、ユングはその原理を心の世界に適応し、「過去」と「未来」の究極的邂逅を夢見、それを確信した。

ところで「対立物の統一」の思想は、西洋のみならず東洋も含めた人類思想の原型であり、その系譜を辿ることは「人類の希求」を跡づけることになる。十九世紀最大の哲学者ヘーゲルも、合理的観念論の展開に際して、「精神の労働」を介した弁証法による対立・矛盾の統合（かの人口に膾炙した「止揚」の論理の核心は「捨てて」「生きている」ことにある）を試みたが、その思考のルーツとなつたキリスト教神学も、思惟ではなく「愛」による神との「和解」を「十字架」（裁きと愛の矛盾・敵対）の秘義で証そうとした。片や東洋にあっては仏教が、とりわけ「即」の理念を介して一と多、有と無等の相対的現実を克服し、「悟り」（空或いは絶対無）の境地（一即多、事事無碍法界）へと誘つた。

キリスト教はもとより（かれがキリスト教に厳しく、批判的であつたのは、「教義」そのものというより、ドグマに拘束された当時の「教会制度」及び植民地支配と結んだ自文化中心の権威主義にあつた）東洋思想（わけても

仏教)に造詣の深かったハーンが、いわゆる生物進化(“強者”の倫理)による“苛酷な生存競争”の故に葬り去られた弱者への配慮を忘れ去り得なかったのは当然の帰結である。否生物進化論は強者と支配と差別の思想的重大欠陥を内に蔵し、生きとし生けるものへの“共生的”共感と“救済”の倫理を完全に欠いていた。こうした外的(生物学的)自然理解を内的(心的)進化論によって補完・相即する必要に迫られたかれは、科学的進化論を生かしつつも、その欠陥を補う内的価値の探求へと心を傾け、かれ特有の“復合思想”を形成するに至る。

最近展開されたハーンの論考のうち、最も注目値するものに、哲学者梅原猛氏のそれがある。氏はハーンとユングは意識の探求に於てその志を一にし、その所説に於て両者は完全に一致すると力説される。氏の指摘は今後のハーン研究に一石を投じて余りある。筆者もかつてその著に於てハーンとユングの方法論的共通面を指摘したことがあるが、シンクロニシティ論の適用もその延長線上にある。

効率や合理化を旨とする近代西欧思想が果して人類に“幸福”をもたらしたか否かについては學者達によって様々な疑問が提起されはじめている。人類の歴史はかつて“単純”であったものを徒に“複雑”化して来ただけのものの、“単純”さにこそ“幸福”の原点が存することを忘れてはならない。まして“幸福”は断じて計量化できぬものである。現代文化人類学の泰斗ヘーエルダール博士の次の言葉はハーンが現代文化人類学の先駆者であったことをも証している。博士は言う、“人類がかつて文明を共有し得たことを今日われわれは誇りに思う。”

〈注〉

- (1) The Writings of Lafcadio Hearn (Boston and New York: Houghton Mifflin Company 1902)
- (2) Ibid.
- (3) Ibid.
- (4) Ibid.
- (5) Ibid.
- (6) C. Douglas Lummis, A New Look at the Chrysanthemum and the Sword, Tokyo, Shōhakusha, 1982, p. 9.
- (7) The Writings of Lafcadio Hearn

- (8) C・H・ウォーディントン『エチカル・アニマル』、内田美恵ほか訳、工作舎、一九六〇年、二九〇頁～二九二頁。
- (9) 拙著『文明史家ラフカディオ・ハーン』、千城書店、一九八〇年、一六四頁～一六六頁。